

Fariha Shaikh,
Nineteenth-Century Settler Emigration
in British Literature and Art

(Edinburgh Critical Studies in Victorian Culture)

Edinburgh University Press, 2018, 256pp.

Paperback £75.00, ISBN: 9-781474-433693

加藤 匠

一見したところこれといった特徴がないように見える文章の背後から、当時の歴史や文化が垣間見えるということは決して珍しいことではない。本書の第五章「移民をめぐる美学」でファリハ・シャイクがその一例として挙げたのは、『メアリ・バートン』からの次のような文章である。

私には、広くて空間に余裕のある、細長く低い木造の家が見える。その周囲は何マイルにもわたって太古の木々が切り倒され、一本だけ残った木がこの家の切り妻壁に影を落としている。家の周りには庭があり、そのずっと先の所には果樹園だってある。小春日和の壮観があらゆる場所に広がっており、その素晴らしい風景を見た人々の心を躍らせるのだ。

その家の戸口に立ち、町の方に目をやりながら、メアリは一日の仕事を終えて帰ってくる夫の帰りを待ちわびている。彼女はそちらをじっと見ながら、笑顔で耳を澄ましている。……

「イギリスから手紙が来たよ！そのせいでこんなに遅くなったんだ！」

かつてレイモンド・ウィリアムズは『メアリ・バートン』におけるカナダへの移民という結末に対し、自ら提起した問題に対して解決策を提示できなかったことの表れであると批判したが、そもそもギヤスケルは何故このような結末を用意したのだろうか。そこには当然、ギヤスケルがこうした結末を構想することを可能にした何らかのコンテキストが存在したはずである。本書を通じてシャイクがわ

れわれギヤスケル研究者に与えてくれる最も有益なものは、まさにこうした移民をめぐる歴史的コンテクストということになるだろう。

シャイクが本書で注目したのは、ヴィクトリア朝期にカナダやオーストラリア、ニュージーランド等への移民をめぐって、様々なテキストが生産されていたという事実であった。彼女は第一章「印刷された移民たちの手紙」で、ジェムが受け取った手紙に象徴されるような、移民たちが続けていた本国との手紙を通じた交流と、それに端を発する情報の拡散のあり方に注目する。1833年にサセックス州ミッドハーストからアッパーカナダのアデレイドに移民したフレデリック・ヘイステッドが書いた手紙はその一例である。行商人だった彼は1830年代に起きた不景気の影響で事業の継続が困難となり、娘と共に労働者として再出発を図ろうとアッパーカナダに渡ったのだが、その後も故国の友人たちに熱心に手紙を送り、移民先の状況や将来の展望を報告するだけでなく、後に続く移民たちには支援を惜しまないことを強調していた。これらの手紙はサセックス州で移民計画の取りまとめをしていたトマス・ソケットにより、他の移民による手紙と合わせて、パンフレットとして刊行された。移民の生活をめぐる言説が雑誌や新聞の記事やパンフレットといった形で広く展開されたことに加え、移民事業を行っていた人々は、地元の掲示板に移民計画や出航予定を派手に貼り出し、移民のガイドブックやマニュアルを刊行するなど、移民をめぐる情報は広く拡散していた。

ただ移民計画に深く関与していたソケットのような人物が熱心に移民先の情報を拡散していたことを踏まえるならば、その信頼性に対する疑義が生じたのは自明のことであろう。第五章で取り上げられる『マーティン・チャズルウィット』が、移民を扱った作品に頻繁に登場する狡猾な不動産会社、嘘をつく代理人、移民先の状況を正確に伝ええない地図といった要素を用いて、移民をめぐる情報の信頼性に対する疑義を描き出していたように、シャイクは本書のいくつかの章を通じて、移民をめぐる表象に疑義を突きつけたものについて論じている。

第三章「断片からなる美学」で論じられるのは、もともとイギリスで作家として活躍しながらも、夫の希望で否応なくカナダに移住することになったスザンナ・ムーディとキャサリン・パー・トレイルという姉妹の作品である。シャイクが特に注目したのは、現在は共にカナダ文学の古典として評価されている、ムーディ

の『未開の地で不便を忍んで』とトレイルの『カナダという未開の地』という、当時広く流通していた移民を奨励する作品が女性たちの移民体験を正確に描いていないことに違和感を抱いた二人が、自身の移民体験を反映させて描いたふたつの作品であった。これらの作品について、従来の文学作品に象徴される男性的なマクロの視点ではなく、女性的なミクロの視点からの物語であり、植民地の成功の鍵を握っているのは、子どもを産み、移民に相応しい態度を彼らに伝える母親とされていることをシャイクは指摘する。

さらに姉妹の作品では、人々にカナダへの移民を説いて奔走する人物は、カナダに人々が移民する度にボーナスを得られる契約を結んだ、移民を推進する組織の代理人とされ、彼が謳っていた理想像と現実との落差が強調されることとなる。シャイクは姉妹の作品を、移民を推進した作品が歪曲していた事実を正そうとするものとして位置づけ直しており、彼女たちは移民当初の苦勞を描き出すことで読者の認識を高め、より良い移民生活に向けた備えをすることの意義を説いているとするのである。またカナダに移民をしたことによって生まれた、イギリスでは接する機会がなかった労働者階級の人々や黒人、アメリカン・インディアンといった人々との交流も姉妹の作品には書きこまれ、姉妹が人種や階級といった従来の枠組みを超えた生活を送っていたこともシャイクは指摘する。

更に、拡散していた植民地表象に疑義を投げかけたとされるのが、第四章「移民を描いた絵画」で論じられる、移民をめぐって描かれた風俗画である。シャイクが取り上げたのは、フォード・マドックス・フォードの『最後のイングランド』、リチャード・レッドグレイヴの『移民たちが最後に見た故郷』、トマス・ウェプスターの『植民地からの手紙』、ジェームズ・コリンソンの『移民からの手紙に返信する』といった作品だ。シャイクは、1830年から1870年にかけて移民を題材とした絵画が三百点以上制作されたという事実を紹介したうえで、移民を推奨する文学作品には描かれることがなかった、彼らが移民せざるを得ない状況を作り出したイギリスに対する苛立ちをはじめ、悲しみや喪失感、絶望といった様々な感情を表現する場として風俗画が機能したことを指摘する。

その際にシャイクが自身の議論の軸とするのが、マーティン・マイゼルの議論を踏まえた、＜19世紀において、小説と絵画と芝居はいずれも視覚的要素と物語とを兼ね備えていたという点で、複雑に絡み合う存在だった＞という認識であ

る。実際ブラウンとレッドグレイヴの作品には解釈を規定する機能を持つ詩が数行に亘って添えられ、状況によって移民せざるを得なくなった家族の姿が前景化され、彼らをそうした状況へと追い詰めたイギリスへの批判が感じられるように意図されているし、移民からの手紙を家族に届ける郵便配達人が描かれたウェブスターの風俗画には、宛名の筆跡から手紙の送り主を知った家族が手紙を開封する前の緊迫感あふれる場面が描かれている。またコリンソンの作品にも、移民からの手紙が開封されるなか、父親が移民先の地図を広げ、子どもが手紙の返事を書いている場面が描かれているが、一度手紙を書く手を止めて妻を見つめる夫とそれに応える妻の不安げな視線からは様々なドラマが感じられるだろう。移民を描いた風俗画には、移民することで二度と故郷を見ることが出来なくなるかもしれない辛さや将来への不安といった要素が描き込まれており、移民を後押しし、移民先を楽園として提示するパンフレットや文学作品とは一線を画すものであったとシャイクは指摘する。

また本書の中でも特に興味深いのが、第二章「移民たちが船上で刊行した新聞」で扱われる、船内だけで流通していた手書きの新聞について一次資料を駆使して論じた箇所であろう。シャイクが取り上げるのは、1839年にシドニーに向かう途上にあるアルフレッド号の船内で毎週土曜日に12回に亘って刊行された『アルフレッド』と1868年にトゥルー・ブリトン号という別の船で刊行されていた『オープン・シー』である。シャイクは現存するこれらの原稿を参照しながら、多様な出自を持つ移民たちの意識を変えて一体感を持たせ、移民後の生活のあり方について学ぶ準備期間として航海を位置づけ直そうと試みる。

『アルフレッド』と『オープン・シー』の共通点としてシャイクが指摘するのが、自らを移住先に向かって航海している共同体としてではなく、陸地に存在する共同体として規定している点である。こうした比喩を通じて、移民たちは船をある種の故郷と感じるようになり、共に乗船している他の移民たちを共同体の仲間として認識するものとされている。船上では規律が厳しく管理されており、そうした環境下で新聞を作るという共同作業が移民たちの距離を縮め、喧嘩や窃盗などの問題を予防する効果もあったとするのである。また『アルフレッド』は自身の船室を持つ人々が中心となって作成され、下級船客を排除する性格を持っていたものの、『オープン・シー』では下級船客にも船内の図書室を開放した記事

が掲載されるなど、より開放的性格を持っていたことも指摘されている。当時の船内で見られた、階級差をどう扱うかをめぐる差異がこの二つの新聞が体現する形となっているのだ。一方、『アルフレッド』はエミリーと二歳年下のイライザのダーヴァル姉妹が揃って寄稿するなど女性にも開かれていたが、『オープン・シー』はその寄稿者の大半が男性であるという違いも見られ、船内におけるイデオロギーが新聞に反映される傾向があることが窺える。ここには、不安や絶望感を抱えるだけでなく、故郷を離れて意気消沈したという、風俗画で描かれた移民像からは大きく乖離した移民たちの姿が確かに見られるのだ。

このような形で本書の内容を概観するなかで、冒頭で投げ掛けた「ギヤスケルは何故カナダへの移民という結末を用意したのだろうか」という問いに対する答えが見えてきたはずである。ギヤスケルはカナダを実際に訪れた経験はなく、こうした光景を実際に目にしていたわけではなかったが、シャイクによれば、ギヤスケルが描き出した、小春日和に照らされ、ジェムやメアリにマンチェスターでは手に入れることが出来なかった、安らぎや安定を与えてくれたカナダの光景は、当時支配的であった〈仕事や食料が豊富で、信頼に値する共同体も存在する〉という、カナダでの移民生活を賛美する言説を踏まえたものだったのだ。シャイクが具体的に論じていないのが惜しまれるが、後にギヤスケルが作品を連載することになる『ハウスホールド・ワーズ』誌をはじめとする様々な雑誌に、移民たちによる手紙が定期的に掲載されるだけでなく、移民をめぐる政策の変更が報じられたり、移民が登場する記事が掲載されていたりしていたことからすれば、ギヤスケルはこうした情報に容易に触れることが可能だった。『メアリ・バートン』や『デヴィッド・コパフィールド』に見られる移民という行為は、複雑化したプロットを締めくくったり、通常の枠組みでは処理しきれない登場人物を処理したりするための都合の良い手段ではなかったのである。

こうした新たな示唆を与えてくれる本書ではあるものの、歴史的なコンテクストを扱った章と比較すると、ヴィクトリア朝期の文学作品について論じた第五章には不満を感じざるを得ない。いくつか例を挙げてみよう。移民とヴィクトリア朝文学との関連を論じたダイアナ・アーチボルドの『ヴィクトリア朝小説における家庭生活、帝国主義、移民』が指摘したように、『メアリ・バートン』とは対照的な、もはや楽園ではなくなったカナダが登場する「従妹フィリス」について、

シャイクは論じていない。近代化を象徴する鉄道工事の責任者になるためにカナダに渡ったホールズワースは現地女性との結婚をフィリス達に伝えるための手段として手紙を用いており、シャイクの議論を補完できたはずだ。またシャイクはナンシー・メッツによる『『マーティン・チャズルウィット』は読者にとって、擬似的なガイドブックであった』という解釈を否定し、ディケンズのアメリカに対する嫌悪感という歴史的コンテクストを考慮していない解釈と批判しているが、『マーティン・チャズルウィット』には作者ディケンズの意図とは関係なく、そのように解釈しうる要素があるということは否定できまい。植民地生活に関するトレイルによるガイドブックについて触れていることを踏まえるならば、そうした可能性も当然視野に入ったはずである。更にこの章でシャイクはディケンズ、ギャスケルに加え、14歳の時にスコットランドから南オーストラリアに移住し、当地での生活を描写するなかで、移民を経験した女性や子どもに温かい目を向けたことから近年になり注目されているキャサリン・ヘレン・スペンスについても論じているが、それぞれの作家について数頁ずつ論じただけに留まり、十分に論じているとは言いがたい。特にスペンスについてならば、ジャネット・マイヤーズ『対蹠地にあるイングランド』や論集『ヴィクトリア朝期の入植者のナラティブ』といった先行研究からの方が、より多くの示唆を得ることができだろう。

とは言え、多くの一次資料を駆使して、時間の流れの中で埋もれてしまった歴史のコンテクストを掘り返した本書の価値が減ずることはない。その意味では、近年いくつもの研究書が刊行されつつあるヴィクトリア朝期の移民をめぐる議論に間違いなく貢献するものと言えよう。本書はエディンバラ大学出版局によるヴィクトリア朝文化研究のシリーズの一環として刊行されているのだが、「学際的アプローチによって相互の研究分野を持続的により豊かなものとし、ヴィクトリア朝期の文学、文化、歴史やアイデンティティに対する多くの見直しを常時提示していく」(x)という言葉に違わない、まさに労作である。

(明治大学商学部兼任講師)